

## 保育学生と看護学生が協同制作した医療絵本の評価と課題

吉川 未桜\*・田中美樹\*\*・吉田 麻美\*\*\*  
中原 雄一\*\*\*\*・菅原 航平\*\*\*\*\*・杉野 寿子\*\*\*\*\*

**要旨** 保育と看護の連携・協働に関する実践研究として、保育と看護の学生で点滴とMRIに関する医療絵本を協同制作し、医療スタッフへのアンケート調査から評価と課題を分析した。その結果、5点中3～4.3点の評価であり、物語の長さや人物の表情、説明の表現など改善のための意見が寄せられた。3～9歳児に読んだ結果では、子どもが点滴やMRIに興味・関心を寄せ、医療者と話せるきっかけとなっていた。改善点も多くあったが、子どもにとって未知で理解困難な内容も、日常から慣れ親しむ絵本の形態だと楽しんで追体験でき、主体的で知的な探求心をもつきっかけとなると考える。また、保護者が子どもに説明が難しい医療的な内容も、絵本であれば気軽に読み聞かせでき、子どもと一緒に楽しみ対話することで親子の相互作用促進や心理的安定につながる。医療絵本は、プレパレーション前や事後も含めていつでも何度でも活用でき、医療における子どもの“心の準備”を支えるツールとしての有用性への期待は大きいと考える。

**キーワード** 医療絵本 保育学生 看護学生 協同制作 子どもの“心の準備”

### 1. はじめに

我々は、令和2年度より、保育と看護の連携・協働に関する研究を行い、臨床において保育士と看護師の連携・協働には課題が生じていることを報告した<sup>1・2)</sup>。この課題に対し、令和5年度から、学生時代からの専門職連携教育として、看護学生・保育学生の互いの強みを活か

した健康・医療・保健に関する絵本を協同制作する「絵本プロジェクト」に取り組んでいる。

特に小児医療の現場では、昨今、検査や治療を受ける子どもに対して、子どもの不安や恐怖を最小限にし、子どもの対処能力を引き出すために、様々な専門職が協働しながらその子どもに適した方法で支援を行うことが求められてい

\*福岡県立大学看護学部・講師  
\*\*福岡県立大学看護学部・准教授  
\*\*\*福岡県立大学看護学部・助教  
\*\*\*\*福岡県立大学人間社会学部・准教授  
\*\*\*\*\*福岡県立大学人間社会学部・講師  
\*\*\*\*\*福岡県立大学人間社会学部・教授

る。しかし、医療や保育の現場で使える子どもの医療絵本は少なく、発達段階によってそれぞれの認知・言語能力が異なる子どもに対して、適切な情報伝達や意思確認支援ツールの多くは、臨床の多忙な合間で制作されている現状がある。そのため、約1年半をかけ保育学生と看護学生が協働して医療絵本の制作に取り組んだ。本プロジェクトの医療絵本制作が、学生時代から専門職連携を学ぶ機会となるだけでなく、医療機関での子どもの最善の利益を保障し、検査や治療を受ける子どもの“心の準備”のための支援方法の一助として、臨休のニーズに応えた社会貢献にもなると考えた。

そこで本研究では、令和5年度に製本した「がんばれ！てんてきマン」「MRIってなあに？」の2種類の医療絵本の有用性や課題などの評価分析、ならびにニーズを把握することを目的として、医療スタッフへのアンケート調査を実施した。

## 2. 方法

### (1) 絵本制作

#### ① 学生募集

筆者らの所属大学の学生を対象に、有償ボランティアとして両学部からポスター掲示によって参加者を募った。その結果、11名の学生が参加し、募集した令和4年1月時点の学年は、こどもコース（以下、保育）学生：2年生3名、3年生3名、看護学生：1年生3名、2年生2名であった（年度をまたいだため、令和5年度はそれぞれ学年が進級）。

#### ② 絵本制作の流れ

医療施設や幼稚園・保育施設等で使用できる健康に関する内容をテーマとし、2チームに分かれ、月に2～3回の討議や協同作業を行っ

た。制作にあたり、図書館や教員所有の健康や医療・保健に関する絵本・紙芝居に目を通し、臨床で使用する場合の使いにくさや対象年齢などの課題を全員で検討した。その上で、臨床現場のニーズに応えられる、新しく、有用なテーマや内容を全員で考えた。その結果、絵本の内容は「点滴」、「MRI」、「1型糖尿病」に関する3つとした。看護学生が医療や保健的内容を、保育学生が幼児にあった言語表現や絵本作成を担うなど、それぞれの強みと専門性を発揮しつつ意見を出し合い、制作した。制作の参考にするための病院見学は、コロナ禍の面会制限が続いており叶わなかったが、小児病院の保育士に学生が直接、内容についての助言をいただくことができた。試作した絵本の発表会後に修正を行い、絵本の試作完成段階で、小児科医のコメントを頂いてさらにプロジェクトメンバー間で修正・校正を重ねた。「1型糖尿病」の絵本については完成に至らなかったため、「点滴」と「MRI」の2種類の絵本を製本した。絵本に用いたフォントは、弱視の子どもも読みやすいよう開発された「UDデジタル教科書体」を採用した。また、絵本のサイズは、子どもが手に取って読みやすいよう、17cm×17cmの正方形とした。さらに、近年外国にルーツをもつ子どもの受診・入院が増加していることから、2種類の絵本それぞれの多言語版絵本（英語・中国語・韓国語）も制作することとした（PDFとしてHP掲載準備中）。

#### ③ 絵本の制作意図

以下に、今回の研究対象である2種類の絵本制作の意図と概要を示す。

【がんばれ！！てんてきマン（図1）】全26ページ（見開き2頁）

・対象は幼児（3・4歳～）。

図1 「がんばれ！てんてきマン」表紙



図2 「MRIってなあに？」表紙



- ・点滴は、治療のための管理の重要性が高い。しかし、子どもの認知力では点滴の重要性が十分に理解できず、踏んでしまったり、不快から外そうとしたりすることがある。
- ・そのため、子どもが点滴を大切にしてくれることをねらいとして、子どもの発達段階の特徴（アニミズム）を活かし、てんてきマンというヒーローを用いて、点滴留置中の注意点が分かるようにストーリーを展開した。

【MRIってなあに？（図2）】全46ページ（見開き1頁）

- ・対象は幼児後期以降（4・5歳以上）。
- ・MRI検査では、強力な磁力が発生するため、検査室入室時の注意点がある。
- ・検査中は動かずじっとしておく必要があるが、20～30分と時間も長く、また工事現場のような大きな音が継続するため、子どもにとってはとても負担が大きい（じっと出来ない場合は、鎮静剤を使用して検査する場合もある）。
- ・そのため、鎮静をせずにMRI検査を頑張る子どものための絵本を制作した。

## (2) 調査研究方法

### ① 調査対象者および調査方法・期間

令和3年度に本プロジェクトの調査研究に協力いただいた本県および近隣県の施設、ならびに本学看護学部の実習施設の合計16施設の看護管理者に、製本した絵本と研究依頼書を郵送した。研究協力の承諾を頂ける場合は、承諾書を返送いただき、院内に研究対象者募集用ポスターと研究趣意書、絵本2種類の掲示を依頼した。小児科病棟医療スタッフ（医師・看護師・保育士・CNS・HPS・放射線検査技師など）には、各自グーグルフォームからの回答を求めた。調査期間は、令和6年6月～8月末とした。

### ② 調査内容、分析方法

アンケート内容は、属性（職種：医師、看護師、保育士、CNS、HPS、放射線技師、その他）、小児医療に携わっている経験年数、絵本を読んだ子どもの年齢、読んだ人、絵本の評価（全体評価、個別評価：ストーリー、お話の長さ、イラスト、色の塗り方、ナレーションやセリフなど5段階）、子どもの反応（自由記述）、要望（自由記述）、希望する絵本の形態、今後の要望、必要な言語などである。

データは単純集計を行い、記述部分は内容毎に分類を行った。

### ③ 倫理的配慮

本研究は、福岡県立大学大学院人間社会学研究科研究倫理審査の承認（第24-03号）を得て実施した。学生は有償ボランティアであり、プロジェクト参加は強制ではなく、いつでも辞退してよいこと、辞退することで不利益はないこと、授業外の活動であるため成績評価とは一切関係がないこと等を保障した。

調査に際して、施設管理者および対象者には、本研究の目的と趣旨、研究への参加および辞退の自由、個人情報の管理方法と研究終了後の保護方法、調査結果の目的外使用の禁止等について書面で説明し、施設管理者からは研究協力承諾書の返送、対象者からはグーグルフォームでの同意ボタンが回答開始時と終了時の2回押された上での返信をもって協力の同意を得られることとした。また、対象者に研究協力の強制力がかからないよう、病棟内で質問紙を各自の意思で自由に受け取れるよう依頼した。施設から承諾撤回書が提出された際には、公表前であればいつでも研究協力を中断でき、データは速やかに破棄されること等を依頼文書で説明した。

## 3. 結果

### 1) 対象者の属性

3施設から研究協力の承諾をいただき、4名（CLS 1名、保育士2名、看護師1名）、から回答を得た。回答者が想定を大幅に下回ったため、小児科外来の医療スタッフが参加する学会（令和6年9月7・8日）で本プロジェクト「療養中のこどもの“心の準備”を支えるための絵本プロジェクト」の発表を行った際に、任意のアンケートを実施した。学会でのアンケートは、絵本の評価（5段階）、要望（自由記述）、

希望する絵本の形態、必要な言語、医療絵本に空想の内容が入ることについての回答を求めた。その結果、学会参加者からの回答は7名（医師2名、看護師4名、その他1名）であった。本研究では、合計11名の回答を元に、制作した絵本についての評価と課題を分析する。

### 2) 絵本の評価・意見（表1～3）

各絵本の評価について、「1：とてもよくない」～「5：とても良い」の5段階評価の平均点を求めた。「がんばれ！てんてきマン」は、病棟スタッフ3.25点、外来スタッフ4.3点、「MRIってなあに？」は、施設スタッフ3点、外来スタッフ4.3点であった（表1）。病棟スタッフの内容別評価では、「分かりやすさ」や「ストーリー」、「ナレーション」などが一部スタッフから1～2点の厳しい評価があった。

感想・意見として、「がんばれ！てんてきマン」では、「ルートの大切さを伝える読み聞かせとしては良い（CLS）」「発想が良く、子どもにわかりやすい（看護師）」との意見があった反面、「説明時には、あまり空想の話をしないので、使いづらい（CLS）」「てんてきマンのデザインが怖い（保育士、看護師）」「ある程度なら敷いても大丈夫なので、ピンと張らない様にする、抜かない、引っ張らない、を伝えて欲しい（保育士、看護師）」などの回答があった。「MRIってなあに？」では、「とてもよく説明していて分かりやすかった（外来医師）」「時間がかかっている間を、宇宙人と遊んでいるのが

表1 全体評価の平均値（5点満点）n=11

	がんばれ！てんてきマン	MRIってなあに？
病棟	3.25	3
外来	4.3	4.3

表2 「がんばれ！てんてきマン」への感想や意見（n=11）

良い評価	<ul style="list-style-type: none"> <li>・ルートの大切さを伝える読み聞かせとしては良い（CLS）</li> <li>・発想が良く、子どもにわかりやすい（外来看護師）</li> <li>・子供にわかりやすい(外来コメディカル)</li> <li>・てんてきマンがかっこいい（外来看護師）</li> </ul>
意見	<ul style="list-style-type: none"> <li>・説明時には、あまり空想の話をしていないので、使いづらい（CLS）</li> <li>・人によって点滴の理由は異なる（点滴は菌をやっつけるだけの物ではない）ため、理由を限定させない方が良い（保育士、看護師）</li> <li>・「狭い所を通る」の意味が分かりにくい（保育士、看護師）</li> <li>・てんてきマンのデザインが怖い（保育士、看護師）</li> <li>・緑の腕が出てくるページがわかりにくいと発言があった（腕のイラストが2つあるからだと思う）（保育士）</li> </ul>
追加の要望	<ul style="list-style-type: none"> <li>・ある程度なら敷いても大丈夫なので、「ピンと張らない様にする」「抜かない」「引っ張らない」を伝えて欲しい（保育士、看護師）</li> <li>・点滴の前に針を刺すことも大事なことを伝えられるといい（外来看護師）</li> <li>・子どもにとって嫌なこと（針が入っていること、腕を動かさないこと）も追加すると良い。「てんてきマンからのお願いだよ」として、子どもにお願いすることも追加できそう（外来看護師）</li> </ul>

表3 「MRIってなあに？」への感想や意見（n=11）

良い評価	<ul style="list-style-type: none"> <li>・とてもよく説明していて分かりやすかった（外来医師）</li> <li>・MRIの注意点を子どもでも分かるように簡潔にまとめられていて良い（外来看護師）</li> <li>・時間がかかっている間を、宇宙人と遊んでいるのが素敵だった。検査を受ける子どもたちも、そんな気持ちで過ごせたら良いと思った。（外来看護師）</li> </ul>
意見	<ul style="list-style-type: none"> <li>・金属に関する説明が少し長いような気がする（外来医師）</li> <li>・少し分量が多い（外来医師）</li> <li>・勤続先のMRIでは金属探知機は使用していない（CLS）</li> <li>・楽しい時間で終わるとは言いきれない（CLS）</li> <li>・目がまわるの表現も難しい（CLS）</li> <li>・説明に合わせて絵をもう少し工夫するとわかりやすくなりそう（外来看護師）</li> <li>・女の子が怖がっている表情からの子どもの捉え方を危惧する（CLS）</li> <li>・女の子が怖がっている表情の絵が多く、子どもが影響されてしまう気がする。もっとニュートラルな表情にして欲しい（保育士）</li> <li>・磁石くんも、表情がイジワルっぽく描かれているのが気になる。検査に関わるグッズは敵ではないため、もう少し柔らかい表情にして欲しい（保育士）</li> <li>・宇宙が子供にとっては怖い感じがした（その他）</li> <li>・星や宇宙人への子どもの捉え方を危惧する（CLS）</li> <li>・宇宙が出てくる意味が分からない。実際に子どもが経験する事実を正しく伝えてほしい。今から検査を受ける子どもが読むと、ただ怖い印象を与えるだけになりそうで読み聞かせは出来なかった（保育士）。</li> <li>・宇宙人が出てくるところが、突然すぎてよくわからない。MRIは宇宙船と言い換えるところからかもしれないが、宇宙人が怖い子どももいるかもしれないので、少し工夫が必要そう（外来看護師）。</li> </ul>

素敵だった。検査を受ける子どもたちも、そんな気持ちで過ごせたら良いと思った（外来看護師）」という評価がある一方、「少し分量が多い（外来医師）」「勤続先のMRIでは金属探知機は

使用していない（CLS）」「女の子が怖がっている表情の絵が多く、子どもが影響されてしまう気がする。もっとニュートラルな表情にして欲しい（保育士）」「宇宙が子どもにとっては怖

い感じがした（その他）」「宇宙が出てくる意味が分からない。実際に子どもが経験する事実を正しく伝えてほしい（保育士）」などの意見もあった。

### 3) 子どもの反応・変化（表4・5）

制作した医療絵本を看護師や保育士から入院中の子どもに読み聞かせしてもらった。「がんばれ！てんてきマン」を3～9歳児に読み聞かせた結果、「私もてんてきマンするよ」「パイキンをパンチ！」などの発言や、「興味を持ってくれた」などの反応があり、「子どもが点滴を大切にできるようになった」「子どもと点滴について話題をするツールになった、子ども自身が入院や病気について関心を持つようになった」などの回答があった。また、「MRIってなあに？」を6～9歳児に読み聞かせた結果、「おもしろいと発言」があり、「子どもとMRIについて話題をするツールになった。子どもがMRIの検査の際にも積極的関心を示した。子ども自身が入院や病気について関心を持つようになった」などの回答があった。

### 4) 空想を含んだ絵本の病院での活用について（図3、表6）

病棟スタッフから指摘のあった空想を含んだ絵本の内容について、医師を含む外来スタッフへのアンケートでその是非を尋ねた。その結果、85.7%（7名中6名）は問題ないとの回答であった（図3）。理由は、「空想を交えなければ、子どもはなかなか受け入れにくいと思うから（外来看護師）」「てんてきマンなどはよいアイデアだから（外来看護師）」などであった。

図3 空想を含んだ絵本が、病院で活用するにあたっての支障はないか？（n=7）

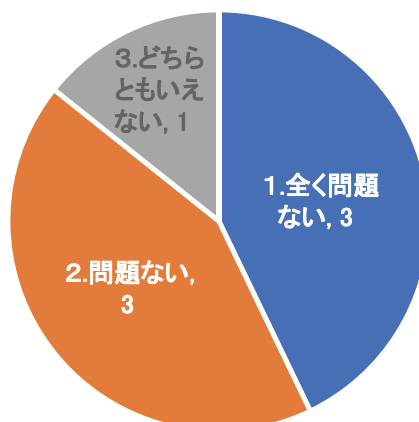


表4 「がんばれ！てんてきマン」を読んだ後の子どもの様子（自由記述） n=2

子どもの年齢	読んだ人	子どもの反応	子どもの変化
4歳、9歳	保育士	・「私もてんてきマンするよ」「パイキンをパンチ！」などの発言があった	・子どもが点滴を大切にようになった
3歳、5歳	看護師	・興味を持ってくれた	・子どもと点滴について話題をするツールになった、子ども自身が入院や病気について関心を持つようになった

表5 「MRIってなあに？」を読んだ後の子どもの様子（自由記述） n=2

子どもの年齢	読んだ人	子どもの反応	子どもの変化
9歳	保育士	おもしろいと発言	なし
6歳、7歳	看護師	なし	子どもとMRIについて話題をするツールになった。子どもがMRIの検査の際にも積極的関心を示した。子ども自身が入院や病気について関心を持つようになった。

表6 空想を含んだ絵本の病院での活用についての理由（n=7）

・空想を交えなければ、子どもはなかなか受け入れにくいと思うから（外来看護師）
・てんてきマンなどはよいアイデアだから（外来看護師）
・子どもにとって面白いから（その他）
・小児科はクリニックの経験しかなく、実際が分からないため「どちらともいえない」と回答（外来看護師）

## 5) 望ましい医療絵本の配布方法（表7）

製本された絵本その他、「PDF（ダウンロード）」や「動画（YouTubeなど）」を希望する回答がみられた。動画の要望が最も多く、“絵本もとても良いが、読んであげるマンパワーもあるため、動画だとより手軽に活用できる”との意見があった。

表7 望ましい医療絵本の配布方法（n=11）

・通常の紙の絵本（2）
・PDF（ダウンロード）（1）
・動画（YouTubeなど）（3）

## 6) 今後医療絵本として要望するテーマ（表8）

「吸入」「注射」「エコー」「レントゲン」「鎮静が必要な侵襲的な検査」「手術」などの内容についての要望が挙げられた。

表8 今後医療絵本として要望するテーマ（n=11）

・吸入	・注射	・エコー	・レントゲン
・鎮静が必要な侵襲的な検査	・手術		

## 7) 今後必要と思われる言語（表9）

本研究で制作中の日本語・英語・中国語・韓国語版の絵本その他、今後必要と思われる言語としてベトナム語、インドネシア語、タイ語、ミャンマー語の要望があった。

表9 日本語・英語・中国語・韓国語以外で、必要と考えられる言語（n=11）

・ベトナム語
・インドネシア語
・タイ語
・ミャンマー語

## 4. 考察

### 1) 絵本の評価と課題

絵本の全体的な評価は、5点満点中3～4.3点とまずまずであった。本研究に参加した看護学生はまだ小児看護学の演習や実習を経験していない1・2年生であり、岩田ら<sup>3)</sup>の、看護2年生が作成した絵本は表現が難しくなる傾向や、内容の量や難易度、子どもの理解力の検討が不十分な面があったとの報告とほぼ同じ学年であった。しかし、今回は幼児の発達や絵本等について専門的に学んでいる保育の2・3年生との協働により、意見交換ができたため、幼児の発達状況を考慮したストーリーや平易な表現など、発達段階に合った絵本となったと考える。

しかし一方で、病棟のCLSや保育士からは、5点中1～2点と厳しい評価もみられた。今回作成した「点滴」や「MRI」に関する医療絵本は、構成要素としてそれらの基本的知識が必須であったが、両学部と学生のともに十分でなく、コロナ禍の影響で病院見学なども叶わなかったことから、学生の臨床の場面や状況のイメージ化やストーリー設定に困難があった。

HP等の写真や教員の説明などで補いながら作成を行ったものの、限界があったと考える。

さらに、臨床からは、「てんてきマンのデザインが怖い」、「MRIを受ける女の子の表情が怖がっている」、「磁石くんの表情が意地悪っぽい」、「宇宙や宇宙人が出てくるところが怖い」など、キャラクターや場面描写に関する改善のための意見が多かった。絵本の柱は文字通り“絵”であり、特に幼児期はこの“絵”を頼りに理解するため、絵本の表現に関する構成要素としてイラストの影響は大きい<sup>3)</sup>。プロジェクトメンバー間では、どのイラストも可愛く、かつストーリーを分かりやすく表現できた（MRI検査前は少し不安な子どもが、終了後は晴れ晴れと自信に満ちた表情になる）と感じていただけた。医療スタッフからの意見は予想外であった。絵本の中の子どもが怖がっている表情に、実際の子どもが影響されるのではと危惧して読み聞かせをしなかったとの状況から、今後の医療絵本におけるキャラクターの表情や場面は、様々な感じ方、捉え方がされることを考慮して描く必要があると考える。

一方で、人数は少ないものの、実際に読み聞かせを受けた子どもたちが怖がったという回答はなく、むしろ絵本に興味をもち、より積極的に点滴や検査について関心を持った発言や行動が記載されていた。これは、今回の絵本の読み聞かせによって、子どもが自らに関連する医療について主体的で知的な探求心をもつことがで

きたことの現れともいえる。幼児期の子どもは、保護・援助を一方的に受ける受動的な存在ではなく、能動的で主体的な存在である<sup>4)</sup>。中水流<sup>5)</sup>は、幼少であっても患児なりの関心や理解を深め、主体的な学習サイクルの基盤を作っていくことが重要と述べている。絵本の追体験によって、子ども自身が見通しをもち、状況を前向きに捉え、役割を理解し、適応していくといった主体性<sup>6)</sup>の発揮にもつながると考える。

また、子どもが怖さを感じるという危惧についても、本研究の絵本の対象年齢である3歳以降について、富田ら<sup>7)</sup>は、3歳半から4歳半の時期は、たとえ出会う怖い絵本が新奇なものであったとしても、「怖さ」に気付いた上で、その先にある幸福感を求めて「楽しめる」ようになる、と報告している。そのため、たとえ絵本の中の子どもが怖がっている表情にみえても、子どもはその先の乗り越えられた結末（幸福感）までを読むことによって、その絵本を楽しめ、また自身と重なる状況に子どもが興味・関心を持つことができると考える。

その他、意見には「説明時には、あまり空想の話はしないので、使いづらい（表2）」、「子どもがこれから経験する事を正しく伝えて欲しい（表10）」など、絵本の空想部分のストーリーに対する指摘があった。一方で、外来医療スタッフからは空想が今回の医療絵本の中に含まれることは、問題ないとの意見が多かった。北

表10 その他、自由記述

- |  |
|--|
| <ul style="list-style-type: none"> <li>・子どもがこれから経験する事を正しく伝えて欲しい。子どもが自分で納得して治療を受ける事はとても大切な事なので、今後に期待している（保育士）</li> <li>・新しい本が出来たら知らせてほしい（外来医師）</li> <li>・サイズが丁度よい。絵も可愛らしく、素晴らしい（外来看護師）</li> </ul> |
|--|



川<sup>8)</sup>は、健康・安全に関する絵本は、知識絵本、科学絵本の分野に入ることが多いが、楽しい物語の中に保健行動の大切さを描いているものもある、と述べている。小児医療において、子どもと家族の不安や恐怖感を軽減し、子どもと家族が主体的に医療経験に関わるよう導くプレパレーションは、正確かつ具体的な情報を子どもに適した方法で提供される<sup>9)</sup>が、医療絵本は、プレパレーションほど正確・具体的に説明することを目的としたものではなく、子どもが絵本としての楽しさ・面白さも感じられることも必要な要素と考える。今回の調査にあたっては、“医療絵本”と表記していたが、“プレパレーション”として用いることを想定した絵本の評価が行われてしまい、それによって、空想が含まれる絵本が医療者の一般的なプレパレーションツールとは異質なため、評価が割れてしまった可能性が考えられる。しかし、近年は、医療現場で行われるプレパレーションも、手術や入院に対する子どもの精神的負担の軽減を目的とした子どものへの状況説明<sup>10)</sup>から、遊びや楽しみを通した子どもの自律、自己効力感など、子ども自身の発達の側面への援助<sup>5・11)</sup>にシフトしてきている<sup>4)</sup>。桑原<sup>9)</sup>は、日本の看護師は子どもに処置や検査の過程をイメージできるように順序立てて伝え、子どもの覚悟を決める力と頑張る力を支援しており、米国のCLSは子どもの検査や処置に関する不安やストレスに注目し、気持ちの表現を促しながら、遊びを通して子ども自身が対処していく過程を支援していた、と報告しており、“頑張って乗り越える”ことだけでなく、“楽しんで乗り越える”ことができるようにすることも、子どもの援助には重要と考える。子どもの発達や場の状況に応じて、子どもに伝える内容は精査・選択されるべ

きであるが、“てんてきマン”や“宇宙に行った夢”などの子どもが絵本の空想世界を楽しめる医療絵本の活用も必要に応じて検討できるのではないかと考える。

## 2) 医療絵本の意義

今回の医療絵本の読み聞かせの実施は、いずれも医療スタッフが担ってくださった。一方、医療絵本は、必ず医療スタッフが読みきかせなければならないものではなく、“絵本”として、保護者も気軽に読み聞かせできるツールである。神道<sup>12)</sup>は、時間や人員の不足といった看護管理上の問題や看護師の認識の差、多忙な小児看護の環境などから、小児看護においてプレパレーションが日常的な看護として定着していない課題を指摘している。その一方で、保護者からの事前説明に納得している幼児は接種時の拒否が軽減する<sup>13)</sup>との報告もあり、保護者からの説明は子どもの心の準備に大きな影響を与えと考えられる。しかし、保護者が子どもに行う説明の実施率は50～80%と幅があり、保護者の意向で子どもに説明をしていない場合や事実と異なる説明を行う場合もあるなど<sup>14)</sup>、保護者が子どもへ適切な説明することは簡単ではない。医療者のプレパレーションが十分に行えておらず、保護者も子どもへの説明に自信がなかったり、躊躇したりする状況では、子どもの“心の準備”が十分できない状況が生じうる。しかし、医療絵本であれば、読み聞かせは子育てにおける日常的な関わりでもあるため、保護者も気軽に行いやすい。絵本の読み聞かせは、読み手と聞き手の心の安定や情緒的な絆を育み、患児と母親の不安を軽減し、コミュニケーションを促し、母子の増進的な相互作用をもたらすことが期待される<sup>5)</sup>。子どもにとって未知

で、必要性の理解が難しく、不安感や不快感を抱きやすい検査や治療・処置であっても、読み聞かせによって一緒に絵やストーリーを楽しむ、内容について対話することで、自然な流れで子どもの不安や疑問、感情や意欲が表出されやすくなる。林<sup>4)</sup>は、保護者がプレパレーションに参加することで保護者の状況理解を助け、母子の相互作用が増進されることで母子ともに不安を軽減していたとの考えを述べている。また、永井<sup>15)</sup>は、絵本を教材として活用することは子どもの主体性を促し、楽しみながら学習の幅や奥行きを広げる機会となると述べている。さらに、絵本は、何度でも好きなだけ自由に、読んだり読み聞かせができる。事後にも読み聞かせを行い、経験を振り返れば、子どもの努力を認め自己肯定感を高めることや、経験した医療の必要性の理解をさらに深め、動機づけを支えることにもつながる。医療絵本は、保護者に読み聞かせとして活用してもらうことで、医療スタッフによるプレパレーションと組み合わせた活用も可能であり、さらに医療現場での子どもの“心の準備”を支えるツールとしての意義と有用性への期待は大きいと考える。

### 3) 保育学生と看護学生の協働について

英国の専門職連携教育センターは、専門職連携教育を、「2つ以上の専門職のメンバーまたは学生が連携とケアおよびサービスの質を向上させるために、互いに学び合う機会(CAIP<sup>16)</sup>)」としている。今回の絵本制作の過程は、それぞれの専門性を発揮すると共に、看護学生は保育学生から子どもの認知・言語発達を、保育学生は看護学生から子どもへの医療を学ぶ機会として、専門職連携教育の一部となったと考える。斎藤<sup>17)</sup>は、健康教育に用いら

れる絵本には様々な構成要素があることを報告しており、今後の医療絵本の制作においても看護・保育双方から内容や文章量、情報量、説明の詳細度、イラストなどについて、忌憚のない意見を出し合って推敲することが重要である。

しかし、現場の専門職連携では、作成した絵本による学習材の利用の手引き等について、専門職者の特性による相違点から意見の対立や、コンセンサスが得られなかったなどの報告もあり<sup>5)</sup>、立場の異なる専門職者同士での十分な情報共有や合意形成・役割分担はより一層重要となる。今回のアンケート結果において、職種によって意見が異なる部分が見られたことも、そういった専門職間の認識や希望の相違があったと考えられ、今後の医療絵本制作においても、様々な意見を検討し、合意形成を目指して作成することが必要である。

### 4) 今後の取り組みについて

今回の医療絵本は、プロジェクトメンバーでの話し合いにより、点滴留置中の注意点(がんばれ! てんてきマン)とMRI検査(MRIってなあに?)をテーマとした。子どもを対象とした点滴の説明は、痛みを伴う点滴確保に関わる内容であることが多い。しかし、点滴の留置も、子どもにとっては非日常であり、また不便ながらも順応し、点滴に意識が向けられていないことも多い。そのため、点滴留置の理由やその際の注意点を子どもに伝える目的で選択された。また、MRI検査については、近年特に鎮静に頼らないMRI検査の重要性も指摘されており<sup>18)</sup>、医療者だけでなく、子どもと家族も参加する医療安全のためにも適時的なテーマであったと考える。今回のテーマにおいて、否定的な意見は特に見られなかったことから、臨床で必

要なテーマ選択であったと考える。今後の医療絵本のテーマとして挙げたものの中には、現在制作中のテーマもあり、引き続き取り組んでいきたいと考えている。

また、絵本の形態としては、現場の人員不足やスマートフォン・タブレット型端末などデジタルツールの日常化を背景として、動画を求める声が多かった。医療絵本の意義で述べたように、特に病児であれば余計に“絵本”を保護者の声で読み聞かせすることの意義は大きいと考えるが、状況に応じて紙の絵本や動画など選択できることは、利便性が高まるため、今後検討したいと考える。また、近年は多様な国や文化にルーツを持つ子どもの受診や入院も増加しており、様々な言語での絵本のニーズがあることが分かった。言語や文化が異なる中での医療を受ける子どもは、さらに大きな不安や混乱を生じると考えられる。そのため、様々な方向性から、子どもと家族の支援につながるよう、今後も取り組みを続けていきたい。

今回は、多忙な臨床に絵本の活用を依頼したため、研究対象者が少なく、今回の評価結果の考察には限界があった。今後、有用性を検証する際には、研究者による参加観察や保護者による読み聞かせの活用・評価も取り入れるなど多面的な評価も必要であると考えます。

## 謝辞

絵本制作にあたり、前福岡市立こども病院小児科の古野憲司先生（現福岡赤十字病院）にご助言を頂きました。厚く御礼申し上げます。また、本研究に御協力頂いた施設管理者様、アンケートに回答頂いた医療スタッフの皆さま、絵本を読んで感想をくれた子ども達に、心より感謝申し上げます。

## 付記

本稿は令和6年度福岡県立大学附属研究所研究奨励交付金（COC研究）の「療養中の子どもの“こころの準備”を支えるための絵本プロジェクト」への研究助成による研究成果の一部をまとめたものである。

## 文献

- 1) 田中美樹、吉川未桜、吉田麻美、中原雄一、杉野寿子、池田孝博（2023）、入院中の子どもを支える保育士と看護師の専門性を活かした協働 第1報—業務内容の現状分析—、福岡県立大学看護学部紀要（20）、9-20
- 2) 吉川未桜、田中美樹、吉田麻美、中原雄一、杉野寿子、池田孝博（2023）、入院中の子どもを支える保育士と看護師の専門性を活かした協働 第2報—協働の現状と課題—、福岡県立大学看護学部紀要（20）、2023、21-32
- 3) 岩田みどり、岩田光児（2001）、看護学生が作成した子ども向け健康教育絵本に関する検討-絵本の言語表現に焦点を当てた考察、日本赤十字武蔵野短期大学紀要（14）、79-84
- 4) 林亮、西田みゆき（2023）、幼児を対象としたプレパレーション研究の特徴、日本小児看護学会誌 32（0）、223-230
- 5) 中水流彩（2020）、幼児期に先天性心疾患手術を受ける患児の主体的なレディネス発達を促進する看護援助の考案、千葉看護学会会誌25（2）、1-11
- 6) 田畑久江（2016）、「子どもの主体性」の概念分析、日本小児看護学会誌 25（3）、47-54
- 7) 富田昌平、福島菜津子（2024）、怖い絵本を楽しむことの発達—1～3歳児クラスにおける絵本の読み聞かせ場面の分析を通して—、三重大学教育学部研究紀要 自然科学・人文科学・社会科学・教育科学・教育実践（75）、179-192
- 8) 北川節子（2022）、絵本を活用した乳幼児の健康・

- 安全指導 ―健康・安全に関する絵本の概要と歯の健康指導―、北陸学院大学・北陸学院大学短期大学部研究紀要 (15)、169-182
- 9) 桑原和代 (2013)、看護師とチャイルドライフ・スペシャリストのプレパレーションにおける介入の違いに関する文献検討、日本小児看護学会誌22 (1)、109-115
- 10) 高橋清子、檜木野裕美、鈴木敦子、赤川晴美、鎌田佳奈美、蝦名美智子、二宮啓子、松森直美、半田浩美、杉本陽子、前田貴 (2004)、日本の小児看護におけるプリパレーションに関する文献検討、日本小児看護学会誌 13 (1)、83-91
- 11) 安部良子、笠原綾乃、武井光、上谷道子、坂本里美、真壁泰子、兵頭裕美、小池隆志 (2017)、子ども用パス (幼児用・学童用) を活用したインフォームド・アセントおよびプレパレーションの取り組み、日本クリニカルパス学会誌 19 (3)、215-220
- 12) 神道那実、大西文子、岡田摩理、遠藤幸子、鳥居賀乃子 (2022)、小児看護におけるプレパレーションの実施状況と影響要因から考えられる課題、日本小児看護学会誌 31 (0)、169-177
- 13) 成田郷実、原田友季、古河佳代、安斎真美、門間敦美 (2020)、予防接種時における3～5歳の幼児の反応：保護者の事前説明との関係、日本看護学会論文集、慢性期看護／日本看護学会、日本看護協会看護研修学校教育研究部学会企画課 編 (50)、150-153
- 14) 藤沼小智子、佐鹿孝子、坂口由紀子、杉江智江、鈴木優子 (2012)、プレパレーションにおける親の説明に関する文献検討、埼玉医科大学看護学科紀要 6 (1)、1-8、2012
- 15) 永井雅子 (2013)、5 教材としての絵本 ベーシック絵本入門、ミネルヴァ書房、京都市、108-111
- 16) CAIPE 2016、The UK Centre for the Advancement of Interprofessional Education : CAIPE (英国専門職連携教育推進センター)、<https://www.caipe.org/about>、(閲覧：2024年11月10日)
- 17) 齋藤めぐみ (2022)、幼児を対象とした絵本活用による健康教育の検討：むし歯・排便に関連する絵本の内容分析、千葉敬愛短期大学紀要 (44)、33-41
- 18) 日本小児科学会・日本小児麻酔学会・日本小児放射線学会 (2020)、「MRI検査時の鎮静に関する共同提言」の2020年3月改訂 (2020年)、日本小児科学会雑誌124 (4)、771-805